

今、体育・保健体育科で目指したい授業 その2(つづき)

平成 25 年度学校教育指導の重点(福島県教育委員会)から

教科や分野の目標を達成するために『平成 25 年度学校教育指導の重点(福島県教育委員会)』に示されている「学習指導要領の趣旨を踏まえた授業改善のポイント」が重要です。今回はポイント3, 4について、考えてゆきたいと思います。

《体育科 (小学校)》

ポイント3 言語活動の授業への位置付け

- 課題解決を図るための情報提供や発問、話合いの仕方を工夫する。
- 運動量の確保に配慮し、効果的な話合いの場と時間を設定する。



実践1 体育科の授業を進める上で、言語活動がいかに重要であるかを指導者がしっかりと受け止め、「教え合い」、「話合い」など、言語活動の目的を明確にして授業に位置付けることが大切です。

《体育科の授業における言語活動を行うねらい》

体を動かすことで身体能力を身に付け、情緒面や知的な発達を促し、集団的な活動や身体表現などを通じてコミュニケーション能力を育成することや、筋道を立てて練習や作戦を考え、改善の方法などを互いに話し合う活動を通じて論理的思考力をはぐくむことなどが求められており、その際に言語活動の果たす役割は大きいと言えます。

活用例1

マット運動の技を向上させる学習をしているときには**教え合い活動**が有効です。「頑張れ」と励ますだけでなく、「こうやるといいよ」「ここがよかったよ」など、自分の考えを整理して助言したり、他者との比較から具体的な動き方を指摘したりできれば、互いに高め合うことにつながります。

活用例2

チームで作戦を立てる場面では**話合い活動**が有効です。相手チームの特徴や自チームの課題を意識して作戦や練習内容を計画し、協力して実践することで、教科や単元の目標にせまることができます。

このことから、指導者には体育科の授業において、目的に応じた言語活動を適切に位置付けることが求められます。

なお、平成 24 年 10 月に会津教育事務所ホームページ「教科の部屋」に掲載しました『**楽しい体育・保健体育科の授業をめざして一言語を活用した指導を通して - その1**』に、言語活動の取り上げ方を示しましたので参照ください。次の表はその一部です。

◇体育科（保健体育科）の運動領域（体育分野）における言語の活用の例◇

H24.10. 会津教育事務所

◎ 言語は知的活動の基盤であり、コミュニケーションや感性・情緒の基盤であるとされています。この言語の果たす役割を踏まえたうえで、言語活動が単に活動に終始することなく、教科のねらいを実現するために意図的、計画的に位置づけることが重要です。

〈言語活動の活用場面〉

◇教師の働きかけ

その際に、留意したい事項

〈実態把握・事前調査〉

◇調査用紙を作成し、児童生徒が考え、記入する場を設定します。

単なる○・×や A・B・C などの記入で終わることなく、単元に対する関心や意識（学習したい内容や得意・不得意の理由など）について、自分の考えや思いを記述させることで、いっそう論理や思考が深まります。

〈オリエンテーション〉

◇自己の目標の設定や身に付けたい技能や体力などについて考え、それを記述したり、発表したりする場を設定します。

自分の現在の体力や技能などをしっかり見つめさせ、目標を立てさせることがねらいです。また、自分の意見や意思を他者へ伝えたり、他者の考えを聞いたりすることで、自分と他者を比較し、本当に自分の立てた目標や計画が実態にふさわしいものなのか考えることにもつながります。

毎時の授業

〈導入〉

◇本時のねらいから、自己の目標を設定させたり、学習にふさわしい準備運動を選択させたりします。

〈展開〉

◇自己の考えを深めたり、発表したりする場を設定します。

◇児童生徒の「伝え合い」「教え合い」「話し合い」の場を設定します。

〈終末〉

◇本時のねらいが達成できたのか否か、またなぜそうだったのかなど、学習活動を振り返る場を設定します。

* 言語を用いた学習活動は、次の事項などについて考え、言葉や文字、身体表現や図や絵で表現するなどして自分の考えや意見を伝えます。

〈導入における言語の活用例〉

- ・学習の振り返りや課題を確認し目標を立てる。
- ・学習内容にふさわしい準備運動をグループで選択する。

〈展開における言語の活用例〉

- ・相手や仲間へ励ましや称賛の声をかける。
- ・自己観察や他者観察からの気づきを教え合う。
- ・模範（映像）や他者との比較から改善方法を教え合う。
- ・チームの練習方法や作戦を話し合う。
- ・楽しくなるためのルールや方法を話し合う。

〈終末における言語活動の例〉

- ・本時のねらいの達成の度合いと理由などを発表する。
- ・次時に向けての目標や課題を文章で記述する。

◎必要に応じて、学習カードに記入する場面を設定し、思考やコミュニケーションのいっそうの深化・拡充を図ります。

*表面では見えにくい「思考・判断」が可視化され、評価に役立ちます。

「伝え合い」

自分の考えや感じたことを相手に伝えます。「こうしたらできた」「ここが大事だ」など。

「教え合い」

動きの改善点など自分の気づきを相手に教えます。「こうすればいいよ」「そうするとできそうだよ」など。

「話し合い」

チームで作戦や練習計画を立てるなど、みんなで考えを出し合い一つの方向性を見いだします。

ポイント4 評価の工夫改善

- 指導と評価の一体化として、PDCAサイクルの確立を図り、指導したことを評価し、評価したことを指導に生かす。
- 1単位時間に評価する内容を原則1項目に絞るとともに、単元を通して各観点をバランスよく評価する。



実践2 「評価計画」をもとに、評価方法を工夫しましょう。

前回、評価計画の重要性について説明しました。効果的・効率的に学習評価を行うには、学習活動に即した評価規準を設定し、はぐくみたい力を学習活動のどの場面において、どのような観点で評価するのか、具体的な指導と評価の計画を作成しておくことが重要です。

視点1

実施可能な学習評価とするために、評価規準をあまり細かくしすぎず、おおむね満足な姿を規準として設定し、評価項目を厳選したうえで漏れの無いように配置しましょう。

視点2

毎時のめあてを一つに絞ることで、学習（指導）活動や評価の観点が明確になります。よって、子どもたちにとっても、本時に取り組むべきポイントが絞りやすくなります。

視点3

各校の授業を参観すると、学習活動を評価する方法として「観察」が多く見られます。「技能」や「関心・意欲・態度」は観察しやすいものの、「思考・判断」「知識・理解」などは見え難いものです。学習カードや自己（相互）評価票を活用するなどして、子どもたちの学習活動を的確に評価することが求められます。

◇学力の3要素と評価の観点の関係◇

[学力の3要素]

- 基礎的・基本的な知識・技能
- 課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力
- 主体的に学習に取り組む態度

[体育科の評価の観点]

- 運動や健康・安全への関心・意欲・態度
- 運動や健康・安全についての思考・判断(※)
- 運動の技能
- 健康・安全についての知識・理解

※ 学習指導要領の体育科の指導内容として、例えば表現運動においては、「表したい動きを表現したり」等が規定されている。このような場合の「表現」は、体育科における技能を示すものであることから、『運動の技能』で評価することが適当であるとされています。